

審査結果の要旨

論文提出者氏名 宮川絹代

本論文は、20世紀ロシアの作家イワン・ブーニン（1870 - 1953）の文学作品において、可視・不可視のイメージが果たした役割に着目し、そこから自然、恋愛、記憶といったブーニン文学に特徴的なテーマを検討したものである。

本論文は三部から構成され、序論、結論、図版、参考文献表を含み原稿用紙換算 766 枚となっている。内容は以下のとおりである。

第一部では、ブーニン文学における視線を分析するが、光に照らし出された世界を捉える「昼の眼」と、現象世界とは異なる形而上学的次元に向けられる「夜の眼」に分けて考察する。「昼の眼」は、絵画的とも言われる鮮やかな風景描写に現れているが、語り手の視線から明らかになるその特徴は、トゥルゲーネフやパウストフスキーなどとは異なり、語り手の自己は絶対的な視線を持って世界の全てを見るのであり、世界はすべて自己の「私の中にある」とする感覚である。一方「夜の眼」は、神秘的体験によって語り手は自己の外部の世界を全感覚で知覚し、「世界の深淵」を覗き、また同時に自己の内部、すなわち「魂の深淵」に眼を向け、そこに「イメージされる記憶」という、限られた個人の記憶の枠組みを超えた可能性を見出す。ブーニンの「イメージされる記憶」は、ベルグソンやブルーストを彷彿させるものの、ブーニンにおいては、どれほど時空を超えたイメージが語られようとも、その中心は自己である。しかし、ブーニン文学の主体は、常にゆるぎない絶対性をもつ自己だけではない。

第二部では、恋愛というテーマにおける不可視のイメージが論じられる。恋愛において見る主体は可視イメージを経て、さらにその彼方に不可視のイメージを追い求める。この不可視のイメージを本論では、ブーニン自身が使った些か珍しい「胎内的なもの *utrobnost'*」という語で表す。この「胎内的なもの」は、内的なものではあるが、精神よりも肉体と結びつき、知性や理性が及ばぬ、直感的に知覚しうるものである。ブーニン文学では、可視性が揺さぶられ自己の絶対性が失われるとき、他者を求める恋愛が始まる。また「胎内」とは、生死の区別のない領域であるがゆえに、これは、ブーニン文学における生死に纏わるメタフィジカルな問題にも関係してくる。ブーニン文学における恋愛が、しばしば性的交渉や死によって終わることも、そこには不可視のイメージ、つまり「胎内的なもの」の喪失が作用していることで説明できる。不可視のイメージは、不完全な自己が関わりうる他者を求めることを可能にするが、性的交渉や死は、対象から不可視のイメージを奪い、それによって自己と恋愛の対象の他者は、それぞれに孤独な一つの存在として完結してしまうからである。ところでこの不可視のイメージは、一つの肉体を去った後、生死の境界を越え、記憶のイメージとして再生する。

第三部では、記憶とイメージの問題を取り上げるが、第二部で取り上げた恋愛のテーマを通して明らかになった、他者との関わりを求める自己に焦点を当てる。プーニン文学のテーマは多様であるが、イメージにはどれも、他者との関わりを探究する自己が現れている。記憶は現前する空間として語られ、恋愛同様に、イメージによって他者と一体になる可能性をもつ。また、そうした場として旅が多く語られる。プーニン文学がロシアやそこでの過去との断絶という亡命の現実を乗り越えることができたのも、記憶や恋愛のイメージのリアリティによると言える。

最後に、ロシア文学史のコンテクストの中に位置づけるとすれば、プーニンの文学は、見る主体に対して見られる対象が客体として明確に成立していた19世紀のトゥルゲーネフやチェーホフの文学とは異なり、主観と客観を融合させる詩的なイメージがその特性である。他方、あくまでも現象世界のイメージを描写するという特性は、その可視・不可視のイメージを、超越的イデア界のシンボルとして受け取ろうとしたシンボリスト達の姿勢とも異なる。19世紀から20世紀のロシア文学の影響を受けつつなおそれらとは一線を画す独特な文学世界を創り出したといえる。

以上が概要である。本論文の主たる功績は以下の点にまとめられる。

まず、創作の軌跡が非常に長いプーニンという大作家の作品をなるべく多く取り上げて、それらの作品を有機的に結び付けうる一つのテーマを決め、力技でまとめあげた力量が高く評価できる。その際、プーニンの作品のみならず膨大な先行研究、また、トゥルゲーネフ、チェーホフ、ナボコフなど他の作家との比較に関連する文献などもしっかり押さえている点も立派である。

本論文の白眉は、恋愛小説を分析した第二部であるが、特にプーニンの文学の中でも真骨頂とされる恋愛をテーマとした作品群は、プロットや思想を分析しても読みこぼしてしまう部分が多い。その読みこぼしを補う方策として、本論では、可視・不可視のイメージに着目してそれを切り口として丹念にテクストを分析したこと、すなわち、プーニン文学では、現象世界を視覚によって微細に描写した上に、さらに可視世界のかなたに不可視的イメージをも見出し、単なる生理的描写に止まらず「自己と他者」や生死をめぐる形而上学的問いも投げかけていることを説得力をもって立証し、プーニン文学の解釈に世界的なレベルで見ても大きく貢献した。たとえば従来、プーニンの小説における恋愛と死の結びつきに言及する研究者は多かったが、両者がいかにして結びつくのかを、本論は、不可視的イメージである「胎内性」の存在によって初めて明快に分析することに成功した。

他方、審査では、次のような問題点・要望が指摘された。1. 本論文におけるキーワードである「イメージ」および「胎内性」について。イメージにはいくつかの意味があり、この語の定義づけは本論の最初になされてはいるものの、いまだ不十分である。utrobnost' というロシア語も複数の意味を持つ語であり、内的・根源的な何かという意味もあることから、子宮を連想させる「胎内性」という訳語を選ぶ必要があっただろうか。2. プーニン文学の中で視覚を特権的に扱い、そのことによって、読みを深めた点は大きいですが、他方、

狭めた点もあるのではないか？ ブーニン文学にとって、他の知覚、例えば音楽に通じる聴覚の果たした役割の大きさにも注目すべきであろう。

しかしこれらはいずれも、本論文の全体としての質の高さを本質的に損なうものではない。本論文が、この領域において大いなる貢献を果たしたことは間違いないと判断される。

以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）を授与するにふさわしいものと認定した。